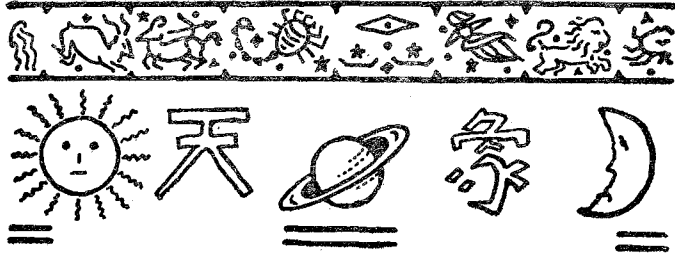


一九三三年
(昭和八年)



七月
(花山天文臺)

I—太陽と月 (天空の明暗)

日付	太陽		月			月の相
	日出 (星座)	日没	月齢	月出 (星座)	月没	
日	時分 (ふたご)	時分	日	時分	時分	
1	4 46	7 15	7.5	12 54 (をとめ)	23 54	☉上弦 1日 6時41分
6	4 48	7 14	12.5	19 5 (へびつかい)	2 49	☾満月 7日 20時51分
11	4 51	7 13	17.5	22 5 (みづかめ)	9 7	☾下弦 14日 21時24分
16	4 54	7 11	22.5	— (ひつじ)	14 17	☽新月 23日 1時 3分
21	4 58 (かに)	7 8	27.5	3 12 (ふたご)	18 41	☽上弦 30日 13時44分
26	5 1	7 5	2.9	8 32 (しし)	21 11	
(翌1)	5 5	7 1	7.9	14 24 (てんびん)	23 56	

II—遊星界

水星 1日には $25^{\circ} 53'$ 離角し夕方の観望に最もよい。30日20時には内合である。光度は0.6等より漸減し+3.0等に迄落ちる。1日の位置は蟹座のプレセペの近くである。30日20時に内合。

金星 光度負3等でまだ視直径も少く観望にはあまりよくない。夕方の星であつて月初め蟹座の西部にあるが東進して12日22時には水星の北 $3^{\circ} 52'$ の所を通り月末にはレグルスをも抜いて ρ 1星の近くにくる。

火星 月初め秋分點の近くにあり漸次順行する。観望不適。

木星 獅子座の東部をゆつくりと順行し光度は負1.4等視直径は月初め32分より月末には30分に迄なる。今月一杯で獅子座を去り乙女座に移る。

土星 山羊座を逆行してゐる。観望に最も適した時節となつた。9日には北24分において月と合になる。環は北面の方が吾々にむいてゐる。A環とそのうち側にある光の強い環との區別も小望遠鏡では容易であるし本體にある帯も案外よく見えるものである。この帯は木星の帯の如くに變化のはげしいものではなく、常にどんよりした色を示してゐる。土星の近くに9等星くらいの星が見えたら衛星のチタンであると思つてまづ間違はない。本年の衝は來月6日である。

天王星 19日9時； $\alpha=1$ 時42.3分， $\delta=+9^{\circ} 59'$ ，光度6.1，15日12時18分南 $5^{\circ} 26'$ で月と合。

海王星 19日9時； $\alpha=10$ 時41.2分， $\delta=+9^{\circ} 13'$ 。獅子座にあり太陽に近い。

流星	6月—8月	ベガスの η ，	速痕
	6月—8月	狐，	速短
	中旬	白鳥	速
	15日—	ペルセウス	速痕

最後のものが特に著しい。

七月の夜の天空

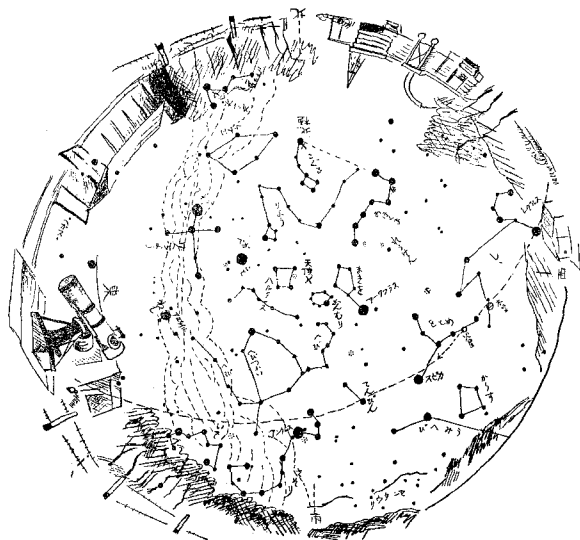
(恒星時 Sidereal Time 14時)

日本の中央部(京阪神地方)で

7月1日ならば午後9時 15日ならば午後8時

東京は約15分早く、福岡は約20分遅く現はる

但し時刻は日本中央標準時



III—七月の星座

行水に晝の暑さを洗ひ落して、さつぱりとした氣持で星を仰ぐ時候となつた。涼臺にねころぶと、目に入るものは夏の星座である。左にゆれ右にゆれ、吾々のすぐ近く迄やつて來たり、無限の彼方に遠ざかつたりする。星の美は物を考えさせる美ではない。吾々を包み吾々のあらゆる感情に満足にあたへる美である。

天全體に輝星が擴がつて如何にも夏らしい。天の川は南北に流れ、其兩岸の一等星は西が織女、東は牽牛である。銀河の中には白鳥が一羽頸を伸して鳴きながら飛んでゆく。南には蝸がわだかまり、銀河に其毒針をひたし、天頂近くにはヘルクレスや蛇遣ひの巨人がひかえてゐる。レグルスがはや没しようとしアクトラス、スピカと共にすぎし春の三角形が名残おしい。